

駿建 2019 Oct. vol.47 No.3

日本大学工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

*Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*



SPECIAL FEATURE

2019年日本建築学会賞
受賞記念インタビュー

SPECIAL FEATURE

2019

日本建築
学会賞

受賞記念

interview

皆さんは、「日本建築学会」をご存知ですか？ 日本には、皆さんと同じように教育機関で建築を学ぶ学生はもちろん、社会へ出てさまざまな建築の分野で活躍されている社会人もまた、たくさんいらっしゃいます。それぞれに切磋琢磨しているものを、日々共有し高め合うために、今から130年以上前の1886年に、日本建築学会は設立されました。そして、1949年から年に一度、発表されてきたのが「日本建築学会賞」です。論文や作品、技術や業績に至るさまざまな功績に与えられるもので、今年の春、2019年日本建築学会の各賞が発表されました。

今年は、羽入敏樹先生による研究が「2019年日本建築学会賞（論文）」を、今村雅樹先生たちによる教育活動が「2019年日本建築学会教育賞（教育業績）」を、卒業生で非常勤講師の近藤創順先生たちによる建築作品が「2019年日本建築学会作品選奨」を受賞されました。今回の特集は、それを記念した3つのインタビューです。研究と教育と建築作品、それぞれは今の時代に、どうして選ばれたのでしょうか。そこには意外と深い話がありました。ぜひ、興味のある分野のことだけでなく、興味のない分野のことについても、覗いてみてください。

(Photo = 表紙：山田薫、P2-3：Jonathan Tieh)



2019
日本建築
学会賞
受賞記念

2019年日本建築学会賞(論文)

建築空間における音場拡散の理論的枠組みと測定法に関する一連の研究

羽入敏樹 短大教授

建築に変革を興す音の捉え方の発明

インタビュイー：羽入敏樹 短大教授

インタビュアー：佐藤慎也 教授、橋本修 教授



佐藤：2019年の日本建築学会賞（論文）の受賞おめでとうございます。僕は先生とは専門が全く異なるのですが、羽入先生と同じ分野の橋本先生と一緒にインタビューをさせていただけます。まず、建築の音響の研究領域の中では、先生はどのような分野の研究をされているのでしょうか。

羽入：建築音響の研究領域はいろいろとあるのですが、大きくふたつの方向性があります。ひとつは悪い音を減らそうというもので、騒音や振動関係はこちらに含まれます。もうひとつが良い音をつくろうという室内音響関係で、私はこちらの領域に入ります。

佐藤：今回受賞された論文は、どのような研究をまとめたものなのでしょうか。

羽入：建築音響学は、1900年にウォーレス・クレメント・セイビンが立ち上げたもので、それほど古い学問ではありません。当時、アメリカのハーバード大学に、とても音が響いてしまう講堂がありました。これでは授業にならないので、どうかしてくれ！と声をかけられたのがセイビンでした。そのときに、彼が実験を重ねて、数式にまとめて理論化しました。その残響理論が、建築音響学のはじまりとなりました。

佐藤：つまり、講堂のような大きめの空間を対象とした音の響きの設計からはじまったんですね。

羽入：そうです。授業で「残響時間の理論」として習うものそのものです。そのベースとなるのが、「拡散音場」というものです。コップに水が入っていて、そこに赤いインクを垂らすと、赤い色がビューっと広がっていきます。さらにかき混ぜると、真っ赤な水になります。そうすると、コップの中のどの位置の水を取っても、同じ赤色。音も同じで、建築空間の中で

どこを取っても、同じ音のレベルになります。セイビンの理論は、「拡散音場」を前提に組み立てられています。

それまでは、このような理論がなかったので、みんな経験と勘で設計していました。だから、ホールや講堂が完成しても、響きすぎたり、逆に響かなすぎたりしました。そういった音響設計という概念が無かったところに発明されたセイビンの理論は、とても画期的でした。そしてその後、これまでの100年間、この拡散音場の理論によって、さまざまなホールや講堂の室内音響が設計されていきました。

佐藤：100年続いてきたものが、何がきっかけで変わりはじめたのですか。

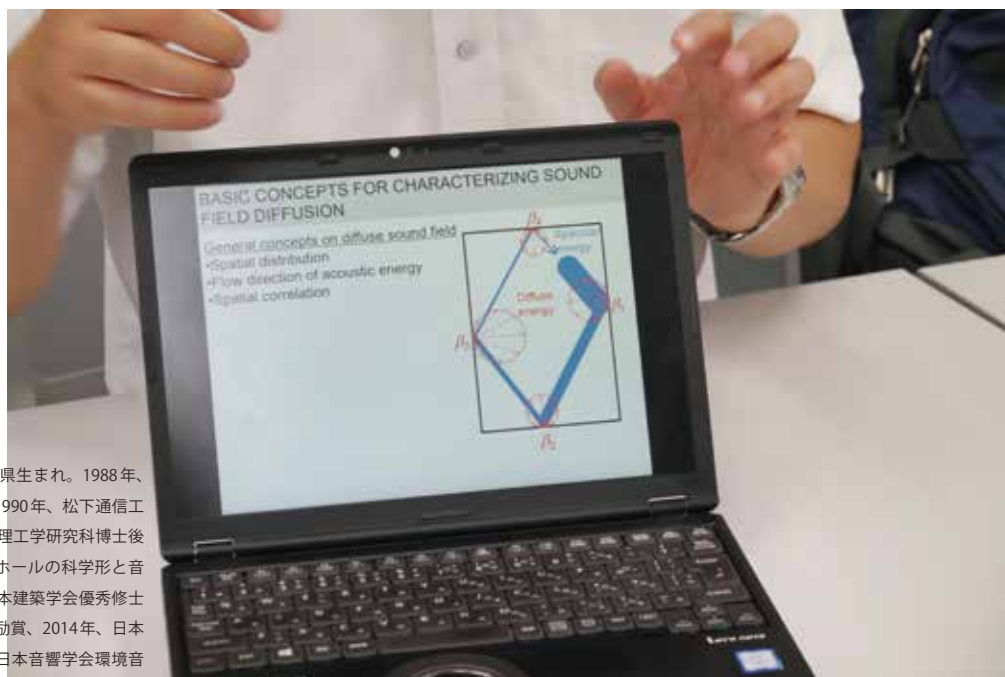
羽入：セイビンの理論は、音楽ホールなどでは有効なのですが、それ以外の建築に対象を移してみると、うまく計算できないことが、2000年に入ったところから、研究者の間でわかってきました。でも、私たちが生活する建築空間の多くは音楽ホールではありません（笑）。そのため、拡散音場を前提としない、あらゆる空間を対象とした、新しい理論が必要ではないかという考え方に向かっていきました。実は、このことについては、この100年の間

にいろんな人がトライしてきましたが、うまくいきませんでした。でも、2000年ころから、うまくいくかもしれないと思われるアイデアが、世界の研究者の間でポツポツ出はじめてきました。私もその研究者のひとりだったわけですが、その流れで、2010年に室内音響の国際会議の基調講演をさせていただくことになり、そこで新しい土台となる理論に関する研究を発表しました。それが、今回受賞した研究の大元となったものです。

セイビンの理論には限界があった

佐藤：ここで改めてうかがいたいのですが、セイビンの理論が前提とした「拡散音場」とは、どのようなものなのでしょうか。

羽入：ある空間で、音をワーッと出し続けると、その音が、その空間に充満します。もし建築空間が音を吸わなければ、その音は大きく鳴り続けるのですが、建築空間は音を吸うので、あるところで音が一定の大きさになります。この音が充満している状態を“定常状態”と言います。定常状態になると、空間のどこを取っても同じエネルギーになっています。それが「拡散音場」です。でも、実際にはそのようなことは起こりません。



はにゆう・とき：1965年、新潟県生まれ。1988年、日本大学理工学部建築学科卒業。1990年、松下通信工業入社。1994年、日本大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。共著に『コンサートホールの科学形と音のハーモニー』など。1990年、日本建築学会優秀修士論文賞、1995年、日本建築学会奨励賞、2014年、日本騒音制御工学会環境デザイン賞、日本音響学会環境音響研究賞など。

佐藤：建築空間が音を吸い、空間のどこを取ってもエネルギーが同じになるというイメージがよくわかりません（笑）。

羽入：吸われる量が少ない部屋だと、発生した音が1、2回壁に当たっただけでは釣り合いません。何回か当たっていくうちにどんどん小さくなっていきます。トータルの吸う量が増えていき、どこかで釣り合うんです。

吸音率が小さい部屋は、吸う量が少ないので、たとえば10回当たってやっと釣り合う。すると、10回当たるまで音を出し続けることになるので、大きいレベルで釣り合います。一方、吸音率が大きい部屋は、吸う量が多いので、たとえば2回当たるだけで釣り合ってしまう。小さいレベルで釣り合うということです。

先ほども話したように、水にインクを垂らすと、ピューッと広まっていきます。これが「拡

散」です。その結果、水とインクが混ざって一様に赤色で均質になるのが“拡散された状態”、どこを取っても同じエネルギーの状態というわけです。

でも、私たちが生活する世界においては、実際の音の場は、完全な拡散でも完全な非拡散でもないんです。最も拡散音場に近いのは残響室です。残響室は、平行に向き合った壁が無くて、いびつな形をしたほぼ100%反射する部屋です。中に入ると、音がどこから来ているかわからない。これが最も拡散音場に近いものです。一方、現実の世界で拡散音場から最も遠いものは、たとえば野原です。完全な非拡散音場であれば、無響室ということになります。これは音が反射も遮へいもされずに進むことのできる音場という意味で、自由音場とも言います。

佐藤：つまり、拡散音場の実空間は、私たちの生活の中には無いと言って良いんですね。

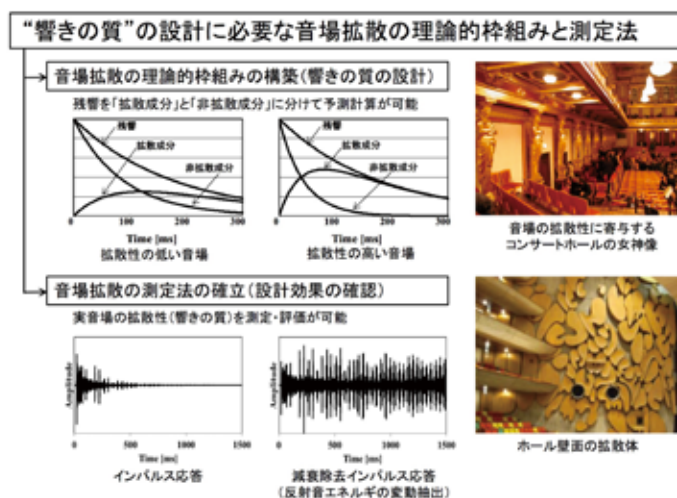
羽入：そういうことです。つまり、私たちが生活する空間のほとんどは、拡散音場と自由音場の間くらいなのです。

佐藤：すると、羽入先生の研究は、これまでには拡散音場が前提の理論だったものを、さまざまに吸音をコントロールすることで、非拡散音場をつくらうということなのでしょうか。

羽入：さまざまな現実空間に適用できる理論をつくらうとすると、セイビンの理想的な拡散音場だけを使っていたら駄目だね、というのは世界の共通認識でした。

でも、私も含めたこの分野の研究者が目指していることは、非拡散音場をつくることではありません。世の中にある建築空間は非拡散音場なので、それを説明できる理論が無いと設計できない。それを説明できる仕組みをつくることを目指しました。

もう少し補足すると、セイビンのつくった理論は、部屋のボリュームや壁の表面積、壁がどれくらい音を吸うかという吸音率のパラメータしかありませんでした。だから、部屋の大きさが決まってしまうと、あとは吸音率を設計すると、残響時間が決まるという理論だったんです。でも、実際は、それだけではなくて、たとえば上野の東京文化会館のホール壁面には、凹凸のある拡散体が付けてあるのですが、



interview



建築に変革を興す 音の捉え方の発明

それはすべて経験則で付けてあるわけです。

佐藤：セイビンの理論でつくられながらも、失敗してしまったホールはあるのですか。

羽入：世界には失敗の例もたくさんあります。ドイツのボンにあるベートーヴェンホールは、天井に三角の拡散体がたくさん付いています。ここでは、とにかく拡散させないと音は良くならないという理論めいたものを徹底してつくられています。でも、実際に音は、拡散させすぎると、良くなるどころか悪くなりますが、その間のどこかに必ず最適解があるわけです。その設計を可能にする新しい理論が必要です。

佐藤：ここで言っている音の良い・悪いは、どのようなことなのでしょうか。

羽入：音が良いというのは、主観です。平均というか、多くの人々が聞いて心地良いと思えるかどうかです。良い音のホールというのは、たとえば、特徴的な音が、パッパッパッと耳に残っているようなイメージを持つことが多くあります。逆に、音を完全に拡散させてしまうと、そういった特徴的な音が無くなってしまいます。それが、ここで言っている音が悪い状況です。音は、ただ響いているだけで、特徴が無く、感動も無い感じになります。

佐藤：もう少しわかりやすいたとえはないでしょうか (笑)。

羽入：料理って、まず素材があって、その特徴を活かすように、切ったり、火を入れたり、味付けをしたり、そして組み合わせていきます。カレーも肉じゃがも、その絶妙なバランスがあるからおいしいと思うわけです。それが、素材の特徴を無くして、同じ素材を同じ量使ったとしても、均質にピューレみたいにしてしまったら、きつとまずくなりますよね。もしくは、

	セイビンの理論	新理論
前提となる空間	拡散音場	拡散音場と非拡散音場の間 (実際の空間)
設計可能な空間	講堂やホール	あらゆる現実空間
設計不可能な空間	それ以外の建築空間	理論的には無い
扱い方	単純 (難易度：低)	複雑 (難易度：高)
パラメータ	主に吸音	吸音と壁の凹凸
カレーに例えると	すべての素材を ピューレ状にしたカレー	素材一つひとつを活かして 料理をしたカレー
つくり出せるもの	均質的な音	響きの質

材料をそのまま、いも、にんじん、たまねぎ、肉と出されてもおいしくない。それぞれが主張しつつ、うまく合体することで、おいしい料理になる。

佐藤：それはわかりやすいたとえです！

ここからもう少し踏み込んでいきたいのですが、今回受賞した新しい研究は、これまでの理論と、具体的にはどのようなところが違ってくるのでしょうか。

羽入：わかりやすく言うと、吸音のことしかなかったこれまで100年の残響理論に、壁の凹凸による拡散の効果を、新しいパラメータとして組み込もうとしています。それが、2000年ころから、世界の研究者の間で同時多発的に提起しはじめられたのです。私が提起して、他の研究者に影響を与えることもあれば、逆もありました。このわずか数年で、世界でさまざまなアイデアが出てきて、切磋琢磨して広がっていきました。

音の新しい理論で建築はどう変わる？

佐藤：実際の建築に対しては、どのような可能性があるものなのですか。

羽入：この新しい理論が土台として広がると、ホール以外のさまざまな建築空間が設計の対象となります。また、吸音だけではなく、拡散も扱えるようになるので、拡散の程度も設計できるようになります。つまりこれは、「響きの質」が設計できますよ」ってことなんです。

あと、建築空間には、いろんな形があります。それが、これまでの完全拡散を徹底させてつくっていくと、音響的には、その形の特徴を

無くしていることになっていたんです。それは、その建築の形だからこそ音という特徴が無いことになります。でも、新しい理論では、その形なりの特徴ある音環境をつくることにチャレンジできることになるんです。

佐藤：でも、そうなってくると、現実の設計における難易度はさらに上がりそうですね。

羽入：確かに確実に上がります。でも、この難易度が上がるということは、音環境をつくることのできる自由度が増えると言ったほうが良いでしょう。

佐藤：なるほど！ そういう言い方もできるですね (笑)。

羽入：つまり、今まで探れなかった可能性を探れる。今まで体験できなかった音をつくることのできるんですから。

佐藤：でも、本当に「響きの質」に触れられるようになり、それが好みをベースにしているのだとすると、そこでの設計者は、ある種の思想みたいなものを持って取り組まなくてはいけなくなるということでしょうか。

羽入：全くその通りです！ まさに、今日、私が言いたかったことはそのことです。

佐藤：道具は使いようですが、最新技術が手に入っても、適当に使ってしまうと自爆しかねません。その分、新しい基本的な音のつくり方が大切になりそうだと思いますし、クライアントが求める響きを、設計者がきちんと理解しないと、この新しい理論もうまく使うことができない

いでしょう。あと、建築の設計では、うまくいく方法が見つかったと、その技をツールのように単純化、定型化して使うことがあります、そのようなことも安易にはできなさそうですね。

橋本：僕らが学生のころは、シューボックスという形のホールの音が良いとされた時代でした。確かに音は良いんです。すると、どこでもその代表的なホールのレプリカがどんどん増えていきました。でもそれは、思考を停止させて、建築の可能性を低くさせることなんです。建築の幅を広げ、音響の意味を広げることには、全くならない。

その裏を返すと、本当の音の良さを探る秘密のツールが無かった。自由に発想を広げて、いろんな建築が持つ可能性に切り込んでいく理論が無かったわけです。だから、これからは、羽入先生が発表されたような理論ができれば、シューボックスのコピーをつくらうとするだけにはなりません。

もう、決められた定食から選ばなくて良いんです。「さあ、新しい理論ができた。その自由を持ってどう設計していこうか」という新しいレシポの開発が求められるようになります。今は、そういう本当に楽しみな段階だと思います。これはまさに変革と言っても良いくらいだと思います。概念を変えた新しい音響設計が、建築家と一緒にあって、新しいものを探っていくようになるわけですから。

佐藤：一方で、劇場・ホールの建築計画を専門とする立場として、その建設の場面に関わることが多くありますが、今の羽入先生の研究の成果によるものは、平均的な性能が求められるがちな日本の公共的なホールにおいては、十分活かされていく道が、実はあまり多くないように思います。しかし、民間の、たとえば音楽に造詣の深いパトロンのような人がホールをつくらうとしたときには、面白いものがつくられる可能性がきつとあるでしょう。その考えによる本質的に新しいものを実現させるためには、ある思想を持ったクライアントや設計者が必要になりそうです。ただ、そう考えていくと、日本ではなかなか難しいかもしれません。海外のほうが、実現性が高いかもしれない。

羽入：日本では、まだ学会レベルで認知されている段階で、これを、建築家も含めて、一般の人々に対して伝えていくのは、次の段階

になると思います。慎也先生の指摘は鋭くて、実はいち早くこの理論を使ってくれたのは海外の方でした。

佐藤：どちらの国の方だったのですか。

羽入：南米アルゼンチンの音楽スタジオでした。

橋本：なるほど。音楽スタジオは、音源をつつたり、収録する場所だから、本当にシビアな拡散のクオリティが必要になります。その要求されることと、新しい理論がマッチングしているってことですね。それがまた、この新しい理論の良さでもあるのではないのでしょうか。ホールだけに留まっていたものが、こうして他のことにも広がって、一般の居住空間までも含めていこうとしている。

羽入：そうなんです。とにかく、すべての空間が対象になるということなんです。これまでのように、拡散音場理論しか無いときには、その対象はどうしてもパフォーマンス空間が中心になっていました。私たちは、音楽ホールの研究者のように思われてきました。もちろん、そういう側面もありました。けれども、これからの室内音響は、すべての空間を対象にしないではいけません。まちに溢れる住宅も、オフィスも、ミュージアムも、図書館も、大学の教室も、病院も同じです。

日本では、室内音響の必要性があまり認識されていないのですが、海外へ行くと、すでにいろんな分野から注目されています。すでに法律の一部となって、レギュレーションが定められているところもあるくらいです。

佐藤：たとえば、どのような場面で注目されているのでしょうか。

羽入：たとえば、学校の教室において音響設計を行うと、教育効果が上がります。音響の設計がきちんとされていないと、教室の半分より後ろの席は、先生の話の50パーセントしか聞き取れないというようなことがあります。その教育効果への影響は計り知れません。そこで、アメリカなどでは、納税者たちがそこにこそお金をかけるべきだとなり、教育省が音響設計にきちんとお金をかけるようになりはじめている地域があるんです。

その他にも、音響設計を行った病院だと、入院してから退院するまでの期間が短くなるというデータが出ています。治療成績が上がれば、州立病院に税金をかける必要が低くなっていくので、納税者たちも興味を持って、このようなトピックに注目しています。そして、すべて法律化していく。アメリカはそういったレギュレーションを州ごとに決められるので、どんどん音響設計に関する法律も育っているんです。

そういうアメリカから日本に帰ってくると、アメリカの空港ではアナウンスがとても聞きやすいのに、日本の空港では響きすぎて、とても聞き取りづらかったりします。こういうことは、非常時にはとても危ない空間を生みだします。そういう場所が、日本にはとてもたくさんあるんです。音の拡散の設計を失敗すると、音があらぬ方向から聞こえてきたりします。こういう視点が弱い日本だからこそ、今回の研究による新しい視点を持って、音楽ホールだけではなく、あらゆる空間における音環境について、建築に関わるいろんな分野の人々にも、社会の人々にも、もっと注目してもらえるように頑張らなくてはと思っています。 ■





2019年日本建築学会教育賞(教育貢献)

大学連携による教育プログラム「建築トークイン上越」の企画および実践

建築トークイン上越実行委員会、岩室の会・岩室塾実行委員会、宿泊体験交流施設月影の郷

大学の外の世界だからこそ学べることを

インタビュー：今村雅樹 特任教授
インタビューア：古澤大輔 助教



いまむら・まさき：1953年、長崎県生まれ。1977年、日本大学理工学部建築学科卒業。1979年、同大学院理工学研究科博士前期課程修了。同年、建築家・伊藤喜三郎に師事。1989年、今村雅樹+TSCA代表。1992年～、今村雅樹アーキテツト代表。2000年、日本大学理工学部助教授。2005年、同教授。2019年～、同特任教授。主な受賞に、日本建築学会教育賞・作品選奨、日本建築家協会 JIA 新人賞・優秀建築ほか。主な作品に、「太田市総合ふれあいセンター」「太田市沢野中央小学校」「上越・石田眼科」「合志市保険福祉センター」「優々の森保育園 pucapuca」「熊本県医師会館」ほか。

— 大学連携による教育プログラム「建築トークイン上越」が、「2019年日本建築学会教育賞(教育貢献)」を受賞しました。おめでとうございます。今村先生は参加講師を務め、これまで6年にわたり、計70名の今村研究室の学生が活動されてきました。大きくはどのような活動になるのでしょうか。

今村：「建築トークイン上越」は、まず、新潟県上越市の中山間地域の廃校を宿泊体験交流施設としてリノベーションし、その後、地元で立ち上げた組織と参加大学と建築家たちがサポートにまわり、その宿泊施設に学生が集い、学生たち自身が代々継続して運営してきたものです。わかりやすく言うと、10年間にわたる、中山間地域をキャンパスとした建築教育です。本学を含む12の大学が連携して組織をつくり、活動しています。

— この活動は、そもそもどこからはじまったのでしょうか。

今村：もう、10年も前のころですが、「建築トークイン上越」以前に、高橋誠一先生がお持ちの山荘「眺山荘」に、当時、若手だった僕と同世代の建築家たちが集まって、交流を図りはじめていたことがきっかけでした。

その交流を経て、約10年前に、法政大学の渡辺真理さんと早稲田大学の古谷誠章さん、工学院大学の木下庸子さんなど5人が集まり、「建築トークイン上越」のプロジェクトがはじまることになりました。僕も当時、声をかけていただいたのですが、そのときは設計のプロジェクトが忙しくて参加できませんでした。その後、5年ほど前から、日大の今村研として参加をはじめました。

— 「トークイン」というネーミングにもあるとおり、この活動の目的は、その土地に学生のような若い人たちが入り込み、地域の活性化をうながしていくことなのでしょうか。

今村：そのとおりです。最初は、お米が豊かに採れる田舎の浦川原地域に入っていたのですが、そこに廃校となった月影小学校がありました。廃校後の使い道を考えていた地域住民からの要請を受けて、先ほどの5名の建築家たちの研究室が、合同で再生プロジェクトを行い、2005年に宿泊体験施設「月影の郷」としてオープンしました。

このプロジェクトは、地域住民と学生が当事者意識を持って取り組めるように、工事の一部をセルフビルドで行いました。3階建ての校舎の1階部分は、地域住民や学生、観光客の交流の場へコンバージョンし、元職員室の壁を取り払って食堂をつくり、その脇には、囲炉裏や元保健室を改修した談話室が設けられました。施設を運営するスタッフは、すべて地元の人たちで構成されています。僕たちも何度も泊まりに行ったり、夏のゼミなどでもよく使っています。その後、「建築トークイン上越」のプログラムは、ここを拠点としてまちへ展開していくことになります。

— 今村先生たちが参加しはじめたころには、廃校の小学校のプロジェクトは、もうオープンしていたのですか。すると、先生が参加されてからは、どのようなことをされてきたのですか。

今村：僕たちが参加する以前、最初の5年は、廃校の小学校を再生し、その小学校がある浦川原地区を対象としたプロジェクトを行っていたようです。そして、僕らが入った年からは、そこを拠点にしつつも、まちに出ることにしました。

上越には、直江津と高田という大きなまちがあります。このふたつが合併したのが上越市なんです。直江津は、町屋がたくさんある商人のまちで、「雁木」と呼ばれる雪除けのアーケードのような通りが商店街にたくさんあります。関わってから最初の2年は、僕らはまず、そのまちを解析して、どうすべきかということについて取り組みました。学生たちは、地元住民の皆さんと一緒にワークショップをやって、いろんなアイデアを出し合いながら考えていきました。

その後は、もうひとつの高田へ移り、プロジェクトを行いました。高田は城下町であり、三大桜の名所になっていたりと、日本で一番古い映画館があったり、とても面白いまちです。このまちにも「雁木」はありますが、日本全国にある過疎化や高齢化といった問題をかかえており、それを既存の町屋を使って解決していこうと取り組みました。

—「建築トークイン上越」では、毎年、実際にはどのような期間に、どのようなことが行われているのですか。

今村：毎年、秋の3日間に開催します。たった3日間なのですが、準備は4月から始まります。日大や早稲田大、日本女子大など、毎年、持ち回りで幹事校を決めて、対象エリア（まち）を決め、課題設定を行い、さまざまなゲストの選定も含めて、3日間全体のワークショップを学生自身が作り、実施していきます。

その成果が、ある程度蓄積されてきたこと、10周年という節目もあり、学会教育賞にノミネートしようということになりました。

すべてを学生の手で行う意義

—企画や準備など、ほとんどを学生主体で行うのですか。

今村：先生は横でファシリテートはしますが、企画して、考えて、行動するのは、すべて主体を持って学生にやらせています。日大は参加する学生数が多いとともに、チームワークやコミュニケーション力が高く、まとめるのもとても上手なんです。先の回では、日大が幹事校となり、座長の学生もとても優秀でした。

—そういうときのリーダーは大切ですね。学生たちにそこまで主体性を持たせることは、とても教育的効果がありそうです。私も他大との合同合宿を毎年やっているのですが、やはり、研究室で幹事を担当したときは、学生たちの成長度がとても大きくなります。外部とのやり取りから、全体の段取りを付けることまで、いろんな経験が彼らを大きく変えます。

今村：そのあたりも含めた教育的効果と地域への貢献を含めて、教育賞では評価していただきました。特に建築家教育としては、学外でさまざまなものごとに触れることはとても大切です。たとえば、地域住民の中で学生が意見を言う「そんなこと、君は学生だから言うのだ!」とか言われる。このようなことひとつとっても、とても貴重だと思います。

—参加する複数の大学は、それぞれに活動をするのですか。

今村：期間中は、すべての参加大学を混ぜた8つくらいのチームを作り、そのときどきの課題に取り組みます。すると、自然とリーダーのような学生が出てくるものです。そこで気付いたことなのですが、日大の学生たちは、他大を凌駕するくらい力を発揮するんです。リーダーではない学生たちも、自分から手を挙げてやるということではなく、「これをやりなさい」と言われると、集中して力を発揮するし、人と共同してまとめることもとても上手くやるようになります。

最初は、学生たちが案を考えていくのですが、そのとき先生たちは、あえて学生と距離を取るために作業をしている小学校ではなく、嵯山荘にいるようにしています。8班に分かれて

進めているので、和気藹々と進めているチームもあれば、喧々囂々しているところもあるんです。でも、そういうことも、先生たちは仲介したりしないほうが良い。あえて任せます。3日間で、地元の人たちや先生たちにプレゼンテーションしなくてはならない使命感もあるから、学生たちは、それに向かって頑張ります。

自分たちで線を引き現場も体験する

—このプロジェクトは、アイデアだけではなく、実際の建物の再生も行ったのですか。

今村：僕らが参加しはじめてすぐのころは、当時、東京理科大にいた安原幹さん、日本女子大の宮晶子さん、法政大の渡辺真理さん、工学院大学の木下庸子さん、僕たちの5大学で、「町屋の再生」をやりました。まちなかに歯抜けのように空き家が出てくるのだけれど、全部が古い伝統的な木造で、必ず手前に雁木があります。まちの活性化のために町屋を一棟、上越市が買い上げて、設計を5大学のコンソーシアムで取り組んで再生しようしました。

学生たちも、先輩たちが小学校の再生をしていることもあるから、自分たちも実際に町屋の改修をやってみたいという気持ちが自然と湧いてくるんです。そうすると、やはりお金が必要になるので、次のタームに向けて、そこは先生たちがお膳立てをして、市の了解を得たり、資金をどうにか工面してもらえるようお願いしました。

次のタームである実際の町屋の改修では、最初は各大学で案をつくって、住民たちと打ち合わせをして、模型もつくったり。これは、東京に戻ってきても行っていたので、夜にスカイプで会議をしたりして、とにかく大変でした。



過去10年間のフライヤー



上越の「雁木」が作り出すまち並み



interview



大学の外だからこそ
学べることを

各大学の案から1案に絞って、その先は各大学で分担して進めていきました。

一般図の図面も学生たちが描いてるんです。たとえば、日本女子大は水回りを担当してください、といった感じです。でも、実際は、既存を解体してみたら、いろんな不具合が出てくるのですが、そういったことも全部学生たちで対応していくんです。防火や断熱が無い、予算もほとんど無い、そういうリアルな状況に対して、どうつくっていくかをみんなで考えていきます。

— 施工も学生たちで行ったのですか。

今村：施工は、地元の工務店が主体ですが、できるところは学生で。でも、漆喰や左官などは難しいから、そこは地元の職人さんに指導してもらって。さっきの小学校に学生たちは泊まりながら、現場に通って、職人さんに教えてもらいながら行きました。

— 実際、用途としては何に変わったのですか。

今村：まちなかに若者がいないという問題が浮かび上がってきたのですが、地域の方々にアイデアをプレゼンテーションしたときに、地元の看護大学が興味を示してくださって、看護大の女子学生5人が住むシェアハウスにすることにしました。

すると、生活をしながら、周辺の高齢者の方々に何かがあったときに、自分たちの演習経験にもなるし、まちなかに若者がいるきっかけにもなる。1階のまちに面するスペースは、少しオープンにできれば、子どもたちの塾にもなるかもしれないし、健康相談も受けられるよ

●5/12 キックオフミーティング		
日時	会場	参加者
5月12日(土) 14:00-17:00	東京女子大学 建築学系 3号館 301号室	建築学系 建築設計学専攻員、学生、関係者
●5月 企画テーマ決定		
日時	会場	参加者
5月19日(土) 14:00-17:00	東京女子大学 建築学系 3号館 301号室	建築学系 建築設計学専攻員、学生、関係者
●6月 基礎講演講座決定		
日時	会場	参加者
6月16日(土) 14:00-17:00	東京女子大学 建築学系 3号館 301号室	建築学系 建築設計学専攻員、学生、関係者
●7月 フライヤー完成、参加者募集開始		
日時	会場	参加者
7月1日(土) 14:00-17:00	東京女子大学 建築学系 3号館 301号室	建築学系 建築設計学専攻員、学生、関係者

5月から7月までのスケジュール

うな場所にできれば、お年寄りの寄り合いの場所にもなるかもしれない。いろんなアイデアを出して実施していきました。

— 毎回、ある課題があり、学生たちが取り組むという形だと思うのですが、課題そのものも学生たちが抽出し、設定するのですか。

今村：だいたいそうですね。だから、地元の方々としては、「今年は何をやってくれるのかな」という期待が大きくなっています。良いことです。

毎年、対象となるエリアも、その都度、学生たちが決めていきます。中山間地域に入っていく課題を発見して、それを解決するために空き家を活用したり。たとえば、今、彼らがやっているのは、市の観光案内をつくることです。こういうことを、秋の3日間のトークインで現地に入り、即席でつくっていきます。そのために、夏に事前に2、3日かけてサーベイへ行ったりもします。その上で、秋に向けて準備をしていきます。

大学外における建築教育のあり方

— 今回は教育賞での受賞でした。このプロジェクトを通じて、学生たちに何を感じてほしいのですか。教育的効果についてはいかがでしょうか。

今村：大学の設計教育や建築家教育は、ミクロコスモス的なところがあります。机上の空論と言うか。最近の学生たちの設計作品も、自分の半径1メートルくらいのところから引張ってきて、私小説的に物語をつくって、プログラム化することが多いと思います。



キックオフミーティング風景



学生ミーティング風景

僕は、そっち側ではなくて、社会に向かって発言しないと意味が無いと思っています。自分の私小説を社会に向かって発言するのも良いですが、そうではなく、対話の中から出てくるものが大切。社会や外の世界に対して、きちんと向かっていける人をつくらないと、多分、外国とは戦っていけないんじゃないかと思っています。

昨年もミャンマーでワークショップをやったら、彼らの目の前には、切実な問題がたくさんあるわけです。そういう問題に対して、建築的にどう解決するかということは重要だと思っています。そういう社会に最初に触れる機会に、「建築トークイン上越」になってほしいと思っています。たとえば、過疎化という言葉の意味は知っていても、実際にどうして人がいなくなっているのか、その原因はどこにあるのか、実際にまちに出て浮き彫りにする力が必要なんです。

— 地域の問題を発掘し、関係者を巻き込み、合意形成していくことは、建築家には必ず必要な能力ですし、それが体験できる「建築トークイン上越」は、まさに効果的なプログラムなんだと思いました。一方で、この議論で付いてくるものに、大学生はどうせ社会に出るのだから、学生時代は閉じこもって自分の論を構築したほうが良いという意見もあります。

今村：もちろん、両方必要だとは思いますが、どちらかと言うと、自分の論を構築するほうにウエイトを置くと、将来的にうまくいかない学生が多いように思います。自分の考えていることや、自分のワールドを、学生時代に一度破っておかなくてはいけないのだと思います。それ



現地ワークショップ風景

<p>8月 事前ワークショップ</p> <p>【日程】 事前ワークショップの開催地、4日や半日程度にわたる開催 【参加者】 事前ワークショップの開催地 【実施内容】 事前ワークショップの開催地</p>	<p>【実施地】 事前ワークショップの開催地 【実施内容】 事前ワークショップの開催地</p>
<p>9月 事前ワークショップを踏まえた企画の修正</p> <p>【日程】 事前ワークショップの開催地 【参加者】 事前ワークショップの開催地 【実施内容】 事前ワークショップの開催地</p>	<p>【実施地】 事前ワークショップの開催地 【実施内容】 事前ワークショップの開催地</p>
<p>10月 本番ワークショップ</p> <p>【日程】 本番ワークショップの開催地 【参加者】 本番ワークショップの開催地 【実施内容】 本番ワークショップの開催地</p>	<p>【実施地】 本番ワークショップの開催地 【実施内容】 本番ワークショップの開催地</p>
<p>11月 報告書作成開始</p> <p>【日程】 報告書作成開始の開催地 【参加者】 報告書作成開始の開催地 【実施内容】 報告書作成開始の開催地</p>	<p>【実施地】 報告書作成開始の開催地 【実施内容】 報告書作成開始の開催地</p>
<p>12月 報告書発表会議</p> <p>【日程】 報告書発表会議の開催地 【参加者】 報告書発表会議の開催地 【実施内容】 報告書発表会議の開催地</p>	<p>【実施地】 報告書発表会議の開催地 【実施内容】 報告書発表会議の開催地</p>
<p>1月 報告書入稿</p>	

8月から11月までのスケジュール



「町屋再生」プロジェクトの模型と実物

ができずに、殻が固くなってしまおうと、それからはどんな意見や状況が向かってきても、全部拒否するだけになってしまいます。

学部の3、4年生なのに、先生や周りの人たちの意見を聞き入れることができない、殻が固い学生がいます。そういう学生に触れると、どうして大学に来ているのだらうと思ったりします。会話をすると、議論をする、一緒にチームでやるということは、とても重要だと思います。

— これはとても大切な議論ですね。殻の構築は必要だけど、その殻をどう柔軟化させておけるか。

今村：そういう意味で、「建築トークイン上越」でやってきた手法が、他で通じるかはさておき、ひとつの建築教育のスタディとしては十分効果があると感じています。

— 5年間行われてきて、学生の変化はありますか。

今村：あります。面白いアイデアはあるのに、最後までたどり着けない学生が少し増えてきたように思います。ある期日があって、まとめなくてはいけないとき、最後はある加速が必要になると思うのだけれど、うだうだアイデアを言い続けながら終わる人とかもいます。本当は、周りの状況に気付きながら、きちんとまとめるようにドライブさせる力を持ったり、内容についても、リアリティについてきちんと考えるようになることが必要だと思います。アイデアにセンスが必要なのではなく、思考そのものが大人の思考でなくては、社会に出て建築はつくれませんから。

— だからこそ、「建築トークイン上越」のような取組は、大学の外で行われるところで、大きな意義を持つ。

今村：本当にそう思います。研究室単体の活動として、今の大学内では、ここまでのことはなかなかできません。それはきつと、どの大学でも同じことではないでしょうか。

このような考えは、研究室を持ったころからありました。僕が研究室を持ったころの大学の状況が引きがねになりました。すでに、高宮真介先生が研究室を持たれており、そこは、高宮イズムの「建築家を目指す」という研究室。それが眼前にあるから、僕は違うスタンスを取らないと意味が無い。だから、外に出て、アート関連のイベントにたくさん携わったり、事務所ではとにかくコンペに参加して。そうやって、高宮研とは違う、多様な建築家像の人材をつくっていかなくてはいけないと思っていたんです。

— 今後の「建築トークイン上越」に期待したい展望があるとすれば、どんなことでしょうか。

今村：建築家の定義が随分変わったな、というところがあります。昔に決めた今村研究室の5原則の中に「建築家を目指すこと」があるのですが、すでにこの「建築家像」そのものが、そのときと今では違います。「建築トークイン上越」のゲストトークで呼ぶ人たちも、まちづくりの人やコンバージョンのプログラムをつくる人など、実に多様なんです。もはや狭義の「建築家」ではない。

だから、そういう意味でも、「建築トークイン上越」を体験した学生たちから、また次の

時代の新しい建築家像をつくり出すような人が出てきたらと思って期待しています。

— 本来なら、大学が変わって、多様化する職能に対応した教育をしなければとなるのだけれど、大学は組織が大きい分、柔軟に変化させることは難しい。だから、今村先生は、あえて大学外の研究室活動を、多様化する職能に対する教育として補っていると言えるのですね。

今村：そのとおりで、大学の中でできないことを、外で教育の一環としてやるということでしょう。最近も、昨年に「建築トークイン上越」を体験した卒業生が、CCCカルチャ・コンビニエンス・クラブのようなところへ就職したり、自分で会社をはじめたという学生もいます。

— それは、明らかな外での教育効果ではないでしょうか。「建築トークイン上越」という外の世界に出て、地域の方々と合意形成を図ったり、職能が拡張しているゲストを呼んで刺激を受ける。それらが、彼らにとってのリアリティとしてフィードバックしている証拠だと思います。

今村：そうですね。あそこいらしてくださるゲストの皆さんは、大学の中にはいない専門家の方ばかりですから。僕は、あと大学には何年かしかいられませんが、大学の中にあるもの、大学の外にしか無いものをきちんと意識して、多様な建築の教育環境を学生に与えていくことができればと思います。 ■

2019年日本建築学会作品選奨

めぐみ会第一仏光こども園新園舎

瀬戸健似（プラスニューオフィス代表取締役）、近藤創順（プラスニューオフィス取締役）

コンセプトを共有し 伝え続ける大切さ

インタビュー：近藤創順 非常勤講師

インタビュー：山中新太郎 教授

— 2019年日本建築学会作品選奨の受賞おめでとうございます。まずは簡単な自己紹介をお願いします。特に、本学出身ということで、大学を卒業してから今までのことを教えていただけますか。

近藤：僕は、1998年に理工学部建築学科を卒業し、大学院へ進学しました。高宮真介研究室の出身です。当時は、佐藤慎也先生が高宮研の助手をされていました。研究室に入るまでは、あまり設計に一生懸命に取り組む学生ではなかったのですが、高宮研に入ってから、周りの学生たちがすごく熱心で、その環境に引っ張られるように、自分も一生懸命に取り組むようになりました。結果、研究室に入ってから数ヶ月間で、建築の面白さに気付きはじめ、大学院への進学を考えるようになりました。だから、大学に入ってから3年間と、研究室に入ってから大学院を修了するまでの3年間の密度の差は、とても大きかったです。

当時の高宮研は、建築家を志し、アトリエに就職を希望する人が多く、僕もそのひとりでした。僕が学生だった当時は、非常勤講師だった佐藤光彦先生が、住宅をいくつか発表されていた時期でした。オープンハウスなどで「梅ヶ丘の住宅」や「仙川の住宅」を見せていただくと、他の建築とは全く違うものが僕に響いてきて、ずっと心に残っていたんです。そして、自分が、いざ就職先を考えた際に、佐藤光彦建築設計事務所の門を叩いていたのです。

— 佐藤光彦先生の事務所には、どれくらい勤めたのですか。

近藤：3年くらいです。最初に担当させてもらったのは「西所沢の住宅」です。それから、いくつか住宅を担当しました。



— その後は、すぐ独立されたのでしょうか。

近藤：新潟の実家が建設会社なので、いつかは実家を継ぐつもりでした。そのため、佐藤光彦建築設計事務所ですべての現場の施工会社で3年間働いて、現場のことをいろいろ勉強しました。その後、これで実家に帰っても大丈夫かな、と施工会社を辞めたころ、たまたま小さな住宅の設計を何軒か頼まれ、ひとりで事務所を構えて設計をしていました。そのころに、今、事務所を一緒にやっている瀬戸健似から声をかけられたんです。

瀬戸は、同じ新潟県五泉市の出身で、中学から高校まで同級生。大学は、日本大学生産工学部建築工学科の出身で、卒業後には組織設計事務所で働いていました。ほとんど同じ道を歩んでいる彼が、独立して「コンペを一緒にやろう」と持ってきた話が、「ゆいま〜る那須」というサービス付き高齢者向け住宅のコンペでした。そのコンペが取れたことをきっかけに、彼と事務所をはじめました。それから10年くらいが経ちました。

はじめての子どものための施設

— 受賞された「めぐみ会第一仏光こども園新園舎」は、近藤さんにとってどのような作品でしょうか。

近藤：「ゆいま〜る那須」をはじめてから、サービス付き高齢者向け住宅や有料老人ホームなど、高齢者向けの施設の設計が続いていたのですが、今回受賞した「めぐみ会第一仏光こども園新園舎」は、はじめての子ども向けの施設です。

高齢者向けの施設の運営は、「社会福祉法人」という、高齢者に限らず、社会的なケアが必要な人たちへの事業を行っているところが多く、その対象には子どもや子育て家庭も含まれます。今回は、「めぐみ会」という社会福祉法人からお話をいただいて、はじめて子ども向けの施設を設計することになりました。保育園やこども園については、設計経験がなかったので、まずはゼロから勉強をはじめました。

こんどう・そうじゅん：1998年、日本大学理工学部建築学科卒業。2000年、同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。2000～02年、佐藤光彦建築設計事務所。2003～06年、日祥工業。2006年、近藤創順建築設計事務所設立。2010年、プラスニューオフィス共同設立。主な作品に「ゆいま〜る那須」「KEYAKI PLACE」「桜美林ガーデンヒルズ」「第一仏光こども園」ほか。主な受賞に、栃木県マロニエ建築奨励賞、東京建築賞共同住宅部門最優秀賞、日事連建築賞一般部門優、BELCA賞ベストリフォーム部門、グッドデザイン賞特別賞グッドフォーカス賞、日本建築学会作品選奨。



「ゆいま〜る那須」(Photo = 新澤一平)

一 はじめて設計するとき戸惑いはありましたか。

近藤：戸惑いはなかったと思います。これは、高齢者向け住宅をいくつか設計していく中で気付いたのですが、設計においては、そのビルディングタイプに慣れていくと、既成概念に自分が縛られてしまうと思うんです。たとえば、最初に設計をした高齢者住宅の「ゆいま〜る那須」は、最初だからそのアイデアが出ていたと思います。敷地内は坂道だらけ、すべての住戸が分棟で、食堂に行くにも屋根の無い外部を歩かないといけな。今回の「めぐみ会第一仏光こども園新園舎」も、こども園や保育園に先入観が無いからこそ、「子どものための施設って面白そうだな」という想いを持ちながら、設計に取り組むことができました。

一 新園舎と畑を挟んで既存園舎があるんですね。

近藤：現在も使用している既存園舎の敷地に対し、畑を挟んで、今回の新園舎があります。お施主さんも僕らと同じ世代で、既成概念にとらわれることなく、いろいろなことにチャレンジしてくれました。もし何十年もやっている

人であれば、園児の安全や、スタッフが使いづらくないかと気にかける部分もあると思うのですが、今回は、「園児第一の楽しそうな場をつくりましょう」という大きなコンセプトを、お施主さんと共有してから設計をはじめることができました。それによって僕らも、設計者として楽しく取り組むことができましたと思います。

一 細長い敷地が特徴的です。設計するときは苦労されたんじゃないですか。

近藤：この特徴を有効利用しよう、という感じでした。

一 配置をしていくときは、どのように決めていったのでしょうか。

近藤：将来的には畑の部分をつなぎ、旧園舎と新園舎を一体化にしたいという構想もあったので、ゾーニング的には、園庭や園舎を畑側に持っていました。また、地方のこども園なので、駐車場もそれなりに必要なんですよ

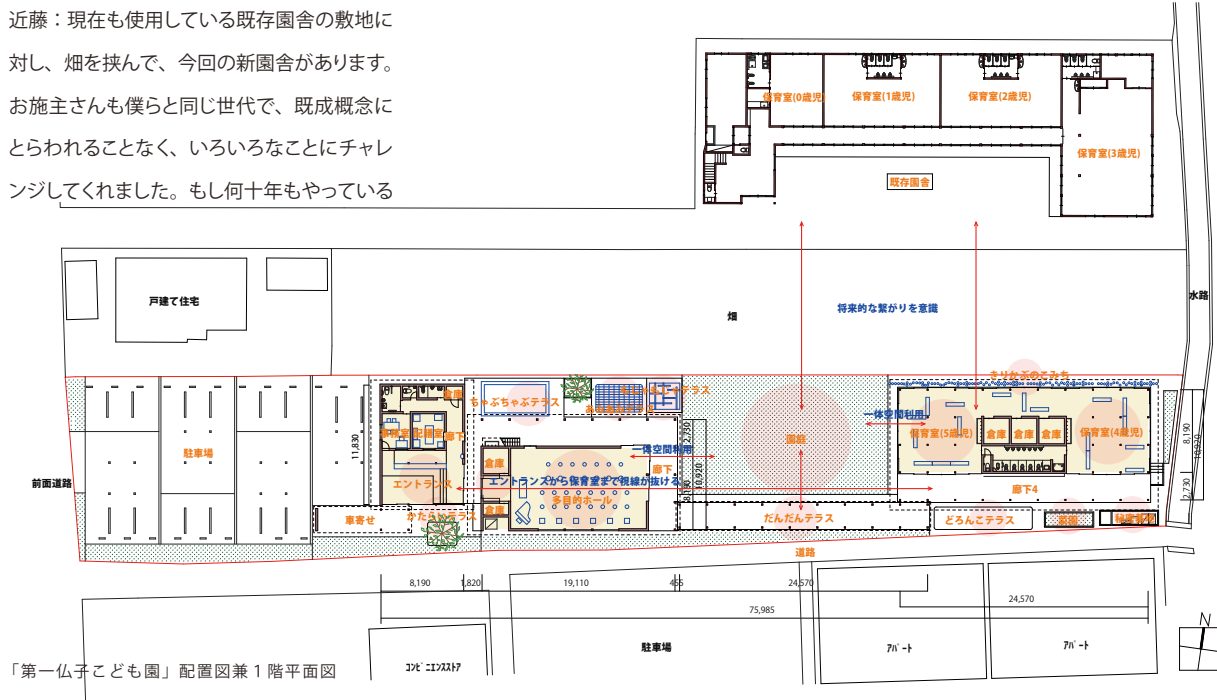
ね。だから、前面道路に対しては、駐車場も意識しました。

一 間口が18メートルで、奥行きが100メートル以上、建物自体の長さが75メートル。かなり特徴的です。ここに園庭を囲むように新しい園舎の保育室と多目的ホールが並んで、園庭が既存園舎の前庭に向き合うような形で設計をしたということですね。子どもたちは何人くらい入るのでしょうか。

近藤：0～3歳児は旧園舎、4～5歳児は新園舎。全体で定員170人です。

一 外装は、全体的にウッドシングルという、木の板張りになってます。素材の選択や、デザインの意図はどういったものなのでしょうか。

近藤：まず、事務所のスタンスとして、無理なく木造でできるならば木造で、というのがあります。これまでの経験から、この規模ならば木造で十分可能です。また、敷地は兵庫



「第一仏光こども園」配置図兼1階平面図



コンセプトを共有し 伝え続ける大切さ

県たつの市で、近くに播磨という有名な木材の産地があります。しかし、敷地の近隣には、そういった木材の地産地消をしているような建物は見当たらない。外装まで木にして「そういったものを前面にアピールするような建物にしませんか」とお施主さんに提案しました。実際には、外装には耐久性の問題もあって地場産材は使えていないんですが、やってみようということになりました。

— 構造も仕上げも、目に入ってくるころのほとんどは、木製の素材を使っていますよね。

近藤：屋根以外は木です。構造設計は、大学の先輩だった、オーノJAPANの大野博史さんにお願しました。

— 近藤先生、瀬戸さん、大野さんと、日大出身者が多く関わった建築なのですね。そのように、木を使うことの子どもたちへの効果を狙ったりしているのですか。

近藤：もちろん、子どもへの影響もあると思っていますし、働いているスタッフへの影響や、ホールはときどき地域開放もしているので、地域の方たちへも、気持ちの良い空間がつくれているのではないかと思います。

— この多目的ホールは、地域の方も使えるのですね。

近藤：はい。だから、なるべく敷地の手前のほうにホールを持ってきています。

— 駐車場や事務所に近いところにホールを置いて、保育室は別棟になっているんですね。プランを見ていると、内部空間と外部空間が交互に入ってくるようで、空間が混ざるような、



「第一仏光こども園」の園庭から多目的ホールを見る (Photo = 新澤一平)

室内にいても外が感じられるような空間になっていることがすごく印象的です。

近藤：ひとかたまりの大きな空間に園児がいるというよりは、なんとなく最初からいろんな場所をつくってあげることで、子どもたちが好きな場所を選べるようにしたいと考えていました。だから、ボリュームも機能別でいくつかに分け、隙間にもいろんな遊び場があります。ボリュームによって天井が高いところがあったり、低いところがあったり。壁の仕上げも、普通の板張りがあったり、でこぼこしていたり。同じ木の空間なんですけれど、多様な場所があって、子どもたちが自分で過ごす場所を見つけれられるようなことをイメージして、設計しています。

— 近藤先生たちの作品は、そういう風に、大きいものをどーんとつくるよりは、小さいものを組み合わせたようなものが多い印象がしています。そういう部分は意識されていますか。

近藤：そういう面もあるかもしれません。気付くと、いくつかのボリュームになっていることが多いです。

— ひとつのプログラムを、小さなものに砕いてから設計をして、あえて余白のようなものをつくっているのかな、という印象を持っています。

近藤：ある程度の規模の木造になると、区画や消防設備が必要になったりするので、他の物件でもそういったことを考慮し、分節したボリュームになっているものもあります。

最初の強いコンセプトを何度も振り返る

— 設計をするときに、近藤先生として、こうい

うスタンスでいきたいとか、ここだけはこだわりたいたいとか、そういう部分はありますか。

近藤：僕はまだ、依頼されたプロジェクトを、その都度、ゼロからスタートさせています。なにか型みたいなものがあるわけではなく、逆に、それをずっと探している段階であるとも言えるかもしれません。

— 学生たちが課題に取り組むときもそうだと思うのですが、周りの建築家からどういう風に思われるかとか、どう差別化をするかとか、そういうようなことを考えたりすると思うんです。

近藤：設計のプロジェクトなので、当然、やっていく中で、与条件や施主の条件が変わっていくと思うんです。だけど、最初に設定した強いコンセプトのようなものは崩しちゃいけない、ということは、瀬戸と僕との共通意識として持っています。それ以外は、無理にこだわっても仕方がないところもある。そのため、最初に提示したコンセプトを、お施主さんも、施工者も、周りの人も含めて、みんなで最後に最後まで共有できるか、というところに一番力を注いでいるような気はします。プロジェクトをやっている途中でも、「最初に何をしたかったんだっけ」と思い返して、関係者みんなとこだわりを共有することは大切ですね。そこをみんなに理解してもらえると、お互いが協力しやすくなる。理解してもらえないと、こだわりに対して「なんで？」という気持ちが生まれてしまう。結局、設計者にとって大事なことは、デザインするとか、図面を引くとかじゃなくて、コンセプトをいかにみんなに伝えられるかだと思うんです。

— 「ゆいま〜る那須」はコンペですね。独立してすぐにコンペを取っているかどうか、という



「第一仏光こども園」外観 (Photo = 新澤一平)



「第一仏光こども園」内観 (Photo = 山田薫)

のは大きいんじゃないかと思うんです。コンペを取ると、「最初のコンセプトを貫く」という意識が強くなると思うんです。それから、いかに案を相手に伝えるかという部分や、いかに案に相手を巻き込むか、ということに対する意識も違いますよね。そこは、建築家にとっては重要だと思います。

近藤：そうですね。コンペでできないことってありますね。

2年生の設計指導を通じて

ー 2年前期の「建築設計II」では、今年から「園児のための遊び場・学び舎」という課題がはじまりました。近藤先生にも指導していただいていたのですが、いかがでしたか。

近藤：ひとつ前の課題「住宅」は、誰でも自分の体験に基づけることができる、とっかかりがある程度はある課題でしたが、保育園や幼稚園は、経験はしているけれど、記憶に無いところだと思います。また、そこで働いている保育士の方がどう働いているかなんて、当然わからない。地域とどう関わっているのかもわからない。そういう部分をイメージするのは難しい課題なんじゃないかと、最初は思っていました。というのも、僕らが設計するときもそうだったので。ただ、僕はたまたま、ちょうど保育園に自分の子どもを預けているところだったんです。そのため、一日の流れやオペレーション、どういったところで遊ぶのか、子どもの身体能力がどのくらいか、といったところが想像できました。すごく良いタイミングのプロジェクトで、だからお施主さんとも通じ合えたという部分もありました。だから、これを学生たちがやるとなると、かなり想像力を働かせないといけないから難しいんじゃないか

なって思ったんです。けれども、実際やってみると、どういう生活をするかは、なんとなくわかっているような感じがして、もしかしたら学生たちには、子どものころの記憶がまだ残っているのではないかと感じました。あまり既成概念が無く、自由に設計をしているなど思いました。

一方で、地域を結び付けるという部分には、苦戦していたように感じます。地域とのコミュニケーションというのが何なのかというのは、自分が学生のときもわからなかったし、その辺は、ある程度社会に出てみないとわからないことなのかもしれません。でも、実はそういうところを考えることが、一番面白いはずなんです。そういう意味で、実は難しい課題だったと思っています。設計するのは簡単だけど、いわゆる課題として、解答を提示するのは、ちょっと難易度が高かったのかな、という気がします。

ー 周りの環境とか都市との関係という意味では、確かに難しかったのかもしれませんが、ただ、自由に設計していたという面では、学生たちには既成概念が無く、ユーザーとしての記憶と、そこから広がるイメージネーションから、自分達のものとして設計に取り組みましたと思います。

ご自身の建築が「新建築」に紹介されたタイミングで、同じビルディングタイプの課題を学生に指導するということはいかがでしたか。

近藤：実は、現在も、同じお施主さんで、同じビルディングタイプの設計を手がけているんです。そこで自分たちがやりたかったアイデアが学生から提案されたりすると面白いな、というのはありました。また、自分の設計にあたって、類似事例を調査していたり、アンテナを張っていたので、僕からもいろんな引き出しを提示できていたのかもしれない。

社会とのつながりを意識しながら取り組む

ー 最後に、学生たちに向けて、先輩として一言お願いします。

近藤：僕は、自分が学生のころ、高宮先生から「建築の設計が社会にどう関わるのか」ということをずっと問われていたんです。でも、学生のころって、なかなかピンと来てなくて、わかっている振りをしていたんです。けれども、実社会に出て、設計をはじめると、いろんなお施主さんや地域に関わっていると、その問いがすごく大事なことだったと身にしみてわかるんです。

将来、設計以外の建築の仕事に就くとしても、建築以外の道に進むとしても、もちろん、設計の道に進むとしても、仕事をするとは、自分の考えが、社会にすごく影響を与えることだと思います。設計の課題で学んだことや、設計の課題で自分の提案が社会にどう関わるのかと考えたことは、将来、すごく役に立つと思います。

設計の課題に真摯に取り組むということは、社会にとっても、自分にとっても、重要だったと思うので、学生の皆さんにはぜひ、そういう視点を持ちながら、課題に取り組んでほしいと思います。今にして思えば、僕も、もっと真剣に取り組んでおけば良かったと思うくらいです。

ー もちろん、学生たちにとって、社会との関わりや地域との結び付きというのは、なかなか実感がわきにくいけれど、どこかでイメージネーションを働かせて、彼らなりに想像できる範囲の中で、社会とは何か、自分の提案が社会にどのような影響を与えるか、ということ意識することは重要かもしれませんね。■

REPORT 1 | 連続特別講義「短大の先」

短大卒業後、編入後の将来を
卒業生を通して考えるトークシリーズ開始!

短 大学建築・生活デザイン学科では、卒業後の進路として、4年生大学への編入学を考えている学生が多くなります。実際、卒業生の約8割が理工学部をはじめとする4年生大学へと編入しています。しかし、編入した後のことを具体的に考えている学生は意外と少なく、将来の目標や編入に対する目的意識の希薄な学生も少なくないように感じています。

この状況を鑑みて、「短大の先」と題した連続特別講義を企画、実施しました。講師には、短大の卒業生で、理工学部の異なる学科(建築学科、海洋建築工学科)に編入し、現在は社会で活躍している2名の方をお願いしました。なお、本特別講義は、理工学部校友会建築部会の後援を受けて実施したものです。

第1回は、NTTファシリティーズの山我信秀氏に、「構造設計者のしごと」と題して、講演いただきました。山我氏は、理工建築へ編入し、現在は大手組織設計事務所にて、構造設計の職に就いています。短大から理工建築へと編入した経緯、構造系分野を専攻した理由にはじまり、大規模複合施設や大学など、山我氏が構造設計を担当した建物の概要まで、写真を交えつつお話いただきました。構造設計という仕事の概要や、力学が実建物の設計にどのように活かされているかなどについて、学生は興味深く耳を傾けていました。

短大建築・生活デザイン学科

TEXT= 廣石秀造 短大准教授

特に、短大時代に斎藤公男先生(現・名誉教授)に出会い、先生のもとで学びたいと進路を決めた話では、具体的な目的を持って進学していることに、学生から驚きの声が多く聞かれました。

第2回は、建設環境コンサルティングの伊藤清香氏に、「進学から就職まで」と題して、講演いただきました。伊藤氏は、理工海洋建築へ編入し、一昨年に卒業したばかりで、現在は、既存建物の耐震性能の調査などを行っています。伊藤氏からは、編入する際に考えたこと、実際に編入した印象、就職活動の体験談や就職してからの想いなど、実体験を踏まえて、学生が不安や疑問に思う事柄について、一つひとつ丁寧にお話いただきました。年齢の近い卒業生からの話に、講演後にも、学生からは多くの質問が挙がっていました。

以上、2回の特別講義において、年齢も編入先も職業も異なる2名の卒業生の話を通じて、学生たちは多くの知識を得たのではないのでしょうか。本特別講義が、編入に対する目的や将来像を改めて考えるきっかけとなり、学習意欲向上の一助となることを期待したいと思います。なお、第3回は、短大から国立大へ編入した卒業生を講師として、現在、企画中であります。 ■



写真1: 講義の様子。メモを取りながら真剣に聴く様子が印象的。



写真2: NTTファシリティーズ 山我信秀氏。



写真3: 建設環境コンサルティング 伊藤清香氏。

REPORT 2 | 2019年度デザインワークショップ

東京オリンピック・パラリンピック 2020 と連動した
ナショナル・ハウスの設計に挑んだ5日間

今年の「デザインワークショップ」は、プロジェクトベースの学修機会となるように、「ナショナル・ハウスの設計」と題して、具体的な敷地を設定し、5日間でフィールドワークをもとに設計まで取り組む課題としました。

ナショナル・ハウス(パートナー・ハウス)とは、昨今のオリンピック・パラリンピックにおいて見られるようになった取り組みです。内容としてはさまざまですが、参加国が、オリンピック・パラリンピック期間中に、市民や観光客に文化体験を提供する場をつくり、プレゼンテーションを行うものが一般的です。しかし、東京においては、土地代が高いほか、人脈が少ないなど、リオやロンドンに比べて、大国以外では実現が難しい環境にあります。

そこで、東京都や青年会議所が場所や人をつなぐ取り組みを行っており、今回のデザインワークショップでは、そのケーススタディとして、4カ所の商店街(台東区浅草、大田区梅屋敷、板橋区中板橋、中央区人形町)と4カ国を設定しました。商店街は、まちづくりの取り組みにおいて行政と密接でありながらも、現代社会の問題(空き家、なり手不足、防災意識の低下など)を内包している場所であり、学生たちは、ナショナル・ハウスの設計をとおして、それらにリアルに向きあうことができました。普段の設計課題とは異なり、デザインワークショッ

理工建築学科

TEXT= 二瓶士門 助教

プでは、実際の設計のようにグループで協働することが求められますが、今回のリアルな諸条件においても、見たことがなく、誰もが共感ができるビジョンの提示をしてほしいと、学生たちに伝えました。

各敷地の事前調査から、以下のような共通課題としました。

1) 継続性：

オリンピック・パラリンピック期間中に、「ナショナル・ハウス」というコンセプトでイベントを企画することになります。このイベントがきっかけとなり、地域にとっても、大使館にとっても、波及効果が生まれ、継続することができる仕組みを考えてほしい。

2) 地域性：

ヒアリングや実地調査などとおして、地域の課題を抽出し、敷地を含む当該エリアにおける、自然発生的な活性化・賑わい醸成に資する、付加的な機能やコンテンツのアイデアを提案に盛り込んでほしい。

3) 転用性：

何かしらの構築物を提案することになるが、その構築物が、イベント時につくられて、終了後に廃棄されるものではなく、転用可能なシステム、もしくはリサイクル可能なものとしてほしい。

台東区浅草では、オーバーツーリズムを抑制するために、混雑度が低いエリアに拠点を分散して設置する提案を行った。

大田区梅屋敷では、軒下や店内で使うことができる3つのサイズの家具を設計し、商店街全体がナショナルハウスとなる提案を行った。

板橋区中板橋では、商店街の中に無料で使える場所が無いことや雑然とした景観から、居場所や景観をつくる3つの提案を行った。

中央区人形町では、人が集まり空間の分節が可能となる、机や椅子、キッチンなどが一体化されたアクティブラックの提案を行った。 図

台東区浅草 × 北マケドニア班(指導教員：飯山先生)：相川文成、石田千裕、小堤匠、嘉待寺玲菜、川又万祐、平山菜歩 / 大田区梅屋敷 × ブラジル(指導教員：近藤先生)：飯森廉、小椋晟加、鹿島啓汰、紙枝良輔、川島真美、森野和泉、岡添安莉 / 板橋区中板橋 × インバウンド(指導教員：二瓶先生)：江口莉央、岡田周也、齊藤立都、佐々木拓海、田沼元、成田駿介、松本希 / 中央区日本橋 × 多国籍交流(ブータン+a)(指導教員：中村先生)：磯野大輝、清水勇佑、中村操香、布川茉奈、秦萌希、本間千晴



写真1：初日は敷地に出向き、商店街の方へのヒアリングや現地調査を行った（梅屋敷）。写真2：面白いアイデアを発見するため、何度も議論を重ねた（浅草）。写真3：講評会に向けて、デザインとプレゼンテーションを構築（梅屋敷）。写真4：協力いただいた商店街の方々も交えた講評会。写真5：最も評価が高かった梅屋敷商店街の提案。写真6：ワークショップ後、東京都のオリパイベントにおいて展示。写真7：各商店街にて、提案内容に関する意見交換。



REPORT 3 | 2019年度建築学科オリエンテーション

ようこそ駿河台キャンパスへ
理工建築2年のオリエンテーション

2年生のオリエンテーションが、6月22日(土)に開催されました。このオリエンテーションの目的は、船橋から駿河台キャンパスに環境が変わる2年生を歓迎すること。また、建築見学を通して、先生や先輩、学生同士の新しいつながりを構築することにあります。当日は、梅雨の時期ということもあり、移動中に少し雨が降るコースもありましたが、予定どおり以下の8コースを実施することができました。今回のオリエンテーションによって生まれたつながりをそのままに、気軽に先生や上級生とコミュニケーションをとってほしいと思います。



Aコースのテーマは、「建築を新時代へ語り継ぐ」。鎌倉文華館、宝庵、建長寺、英勝寺、吉屋信子記念館をバスでめぐった。写真は、山口文象が設計した宝庵での集合写真。



Bコースのテーマは、「上州富岡駅と現代建築作品・近代産業遺産を巡る」。富岡駅(TNA設計)について、佐藤光彦先生が説明をしている様子。



Dコースは、丸の内・銀座周辺のまち歩きやオープントップバスに乗りながら、建築家によって設計された建築物や、パブリック・アート、ギャラリーなどをめぐった。写真は、資生堂ギャラリーの展示を見学している様子。



Eコースのテーマは、「江戸・東京の都市の歴史と文化を体験しよう」。江戸東京博物館にて全員で集合写真。



Fコースのテーマは、「特殊設備建設現場 in 豊洲」。(仮称)Dタワー豊洲新築工事現場を先生方の説明とともに見学し、その後、豊洲市場の見学を行った。写真は、工事現場での集合写真。



Gコースのテーマは、「東京の中心を彩る建築を、オープンバスで巡る」。オープントップバスで、皇居・銀座・丸の内をめぐり、その後、東京国際フォーラムや相田みつを美術館などを見学した。写真は、ランチの様子。



Hコースのテーマは、「水上バスで巡る東京の橋&防災体験」。水上バス(TOKYO CRUISE)乗り場にて、全員で集合写真。



Iコースのテーマは、「内側から学ぶ、東京ドームと日建設計」。写真は、飯田橋の日建設計を訪ねて、設計活動について説明を受ける様子。

理工建築学科

TEXT= 二瓶士門 助教

Aコース：建築を新時代へ語り継ぐー鎌倉の建築遺産を訪ねてー/重枝、田所、加藤、大川

Bコース：上州富岡駅と現代建築作品・近代産業遺産をめぐる/山中 佐藤(光)、井本

Dコース：丸の内・銀座の建築とアートめぐり/佐藤(慎)、堀切

Eコース：江戸・東京の都市の歴史と文化を体験しよう/根上、宇崎崎、赤澤

Fコース：特殊設備建設現場 in 豊洲/蜂巣、井口、阪本

Gコース：東京の中心を彩る建築を、オープンバスで巡る/長沼、古橋、山田、田嶋、道明

Hコース：水上バスで巡る東京の橋&防災体験/中島、石鍋

Iコース：内側から学ぶ、東京ドームと日建設計/岡田、宮里、廣石

#49 ゲスト：伊藤暁

TEXT=石田弘樹（4年 | 古澤研）

今 回のゲストは、建築家であり、東洋大学准教授でもある伊藤暁さんでした。以前、伊藤暁研究室の方向性を研究室の学生から聞いていたので、ご本人から詳しいお話がうかがえることを楽しみにしていました。特に興味深かったのは、現代において「時間」をどのように取り扱うか？というレクチャーです。近代において時間を扱った建築として挙げられるメタボリズムは、システムが先行しすぎたため、硬直してしまいました。現代の建築には、予想できない外敵（ハッカー）を許容する器の広さが必要なのではないか、というお話でした。そこで紹介されたヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展・スペイン館の「unfinished」の写真は、未完成の建築が持つ寛容さと人間の力強さが写されていました。建築家は、どこまで建築をつくれればよいのか、これからの建築家の職能について深く考えさせられるレクチャーでした。



NEWS & TOPICS

2019年第14回日本構造デザイン賞を与那嶺仁志非常勤講師が受賞

与那嶺仁志非常勤講師（空間構造デザイン研究室OB・1994年卒）が、「道の駅まじこ」によって「2019年第14回日本構造デザイン賞」（主催：日本構造家倶楽部）を受賞した。この賞は、構造設計において独自性のある技術をもって、社会性、文化性のある建築作品の創造に貢献した個人などに対して授与される。



JIA 東北住宅大賞 2018 奨励賞を神田順客員教授が受賞

「JIA 東北住宅大賞 2018」（主催：日本建築家協会（JIA）東北支部）において、神田順客員教授、西一治氏（アトリエ71）の建築作品「潮見第」が「奨励賞」を受賞した。本作品は、東日本大震災で被災した漁業集落のまちづくり復興を進める中で、拠点となる唐丹小白浜まちづくりセンターを立ち上げ、町内の杉を 100㎡使用した伝統木造による事務所兼住宅として完成したもの。本賞は、東北 6 県につくられた住宅を対象とし、デザイン・性能・工法などにおいて、東北の景観と環境に根ざした、優れた住宅を生み出した設計者と施主・施工者に対して授与される。大賞 1 点、優秀賞 3 点に次ぐ奨励賞 3 点に選ばれた。



第 54 回地盤工学研究発表会において建築学専攻 2 年の小林亮太君が優秀論文発表者賞を受賞

「第 54 回地盤工学研究発表会」（主催：地盤工学会）において、建築学専攻 2 年の小林亮太君（山田・道明研）の論文「低拘束圧時における豊浦砂のせん断剛性の評価 ベンダーエレメント試験を用いた検討」が「優秀論文発表者賞」を受賞した。本賞は 35 歳以下の者を対象として、優れた論文・報告の講演者の中から優秀な講演を行った 132 名が表彰された。

2019 年度日本音響学会騒音・振動研究会において建築学専攻 2 年の後藤佑太君が学生優秀発表賞を受賞

「2019 年度日本音響学会騒音・振動研究会」（主催：日本音響学会騒音・振動研究委員会）において、建築学専攻 2 年の後藤佑太君（富田・阪本研）の論文「実住宅における複数の振動源を対象とした振動応答量と振動感覚評価に関する検討」が「学生優秀発表賞」を受賞した。

第 41 回コンクリート工学講演会において博士前期課程修了の蓮池類さんが年次論文奨励賞を受賞

「第 41 回コンクリート工学講演会」（主催：日本コンクリート工学会）において、博士前期課程修了の蓮池類さん（長沼・田嶋研）の論文「Shear-Friction モデルの釣り合い方程式に基づく RC 造柱の軸限界状態曲線の修正式」が「年次論文奨励賞」を受賞した。本賞は 39 歳以下の者を対象として、優れた論文・報告の講演者の中から特に優秀な講演を行った者が表彰される。

尾花沢市より中島肇教授が感謝状を受領

中島肇教授が、新庁舎建設にあたる多大な貢献により、尾花沢市より感謝状を受領した。中島教授は、多雪地域である山形県尾花沢市に建設される新庁舎建設に向け、適切な雪対策や防災拠点として求められる高い耐震性能など、実施設計内容の妥当性について技術的・専門的な見地から検証する「設計技術検証委員会」の委員を務めた。

MESSAGE FROM OB/OG VOL.8

より良い建築をつくるために
建築の他分野の職能を知る



山田達也 (やまだ・たつや)

学部卒業：2008年

大学院博士前期課程修了：2010年

所属研究室：空間構造デザイン研究室(斎藤公男・岡田章研究室)

修論テーマ：ケーブルネット構造の地震時挙動に関する基礎的研究

勤務先：竹中工務店

部署名：設計部構造部門

私の仕事は「構造設計」です。構造設計とは、建築物が地震や風などの外力に対して、安心安全な建築物にするために力学を用いて計算し、骨組み（構造部材）を設計するものです。天井などが貼られず、骨組みがむき出しのことも多いのですが、空間構造（ドームやアリーナなどの大空間）では、構造そのものが建築物の屋根のデザインと直結するため、そこに美しい構造設計（構造デザイン）が求められるものです。現在は、2年間の研修期間中で、先進構造エンジニアリング本部という部署に所属し、主に大学時代に勉強したことをもとに、空間構造の解析や技術開発を行っています。

大学に入学した当初、建築学科は、工学的な力学などを勉強する学科だと思っていましたが、入学してみると、デザイン（意匠設計）を志望する人が多いことにびっくりしました。しかし、そういう私も、時間が経つにつれて、デザインの面白さにのめり込んでいきました。意匠設計を目指した時期もありましたが、3年生のコース分けのころには、自分は構造設計が向いていると実感し、大学院も視野に入れて、構造設計の職を目指すようになりました。

大学院を修了後、就職したころは、構造設計という仕事はそれだけをやれば良いと思っていましたが、実際の仕事に携わると、意匠設計や設備設計、施工など、他の職種と協働することが必要



図3 JSCA賞新人賞受賞作「ヴォーリス記念アリーナ」

だということに直面しました。はじめは相手の職能が理解できず、他の職能からの要望をただ構造設計に反映することはできませんでした。しかし、それでは良い建築にすることはできません。他の職能についてきちんと知ること、構造設計だけでなく、建築そのものをより良くすることが可能となります。建築はチームで作り上げていくものだということを、日々、学んでいきました。

研究室で空間構造デザインを学んでいたこともあり、それらに携わりたいと、常に手を挙げていました。そして、そのチャンスが、入社4年目に巡ってきました。そのプロジェクトは、中高一貫校のアリーナの構造設計を担当するものでした。クライアントや設計者である建築家との打ち合わせを重ね、木造屋根のアリーナ（スパン39×32メートル）を実現することができました。研究室で学んだことをもとに、架構形式（図1、2）を提案した空間構造デザインを実現することができました。2017年に竣工した建築（図3）は、2018年の「JSCA賞新人賞」という名誉ある賞を受賞することができました。

専門分野が何であれ、大学時代に勉強したことは、自身の知識の基礎となり、力となります。この基礎があるからこそ、就職後に何がやりたいか、どういう建築に携わりたいかが具体的に見えてくるのだと痛感しました。後輩の皆さんは、どうか、今、目の前にある課題を乗り越えながら、やりたいことができる職場を見つけてください！

▲

※一般社団法人日本建築構造技術者協会。建築構造に関する高度な技術と豊富な実務経験を有する建築構造技術者の団体。

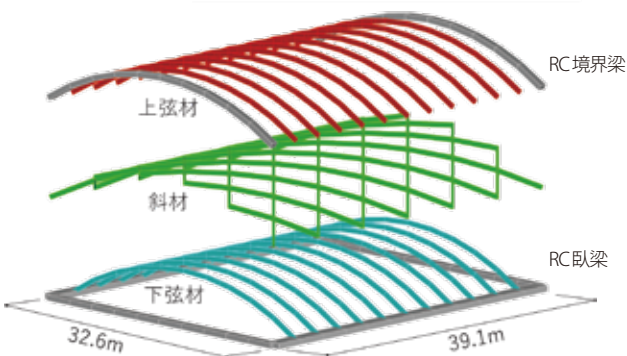


図1 3層に構成した木造複層格子梁（上弦材、斜材、下弦材ともに大断面集成材(E105-F300)）

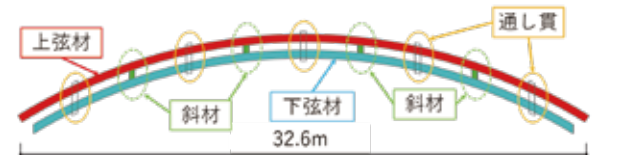


図2 フィーレンディール架構（上弦材、斜材、下弦材を積層させることにより、上弦材と下弦材でフィーレンディール架構を構成。斜材と通し貫はウェブ材として機能。）

ARCHITECTURE & ME

[連載] 私と建築 vol.97

東京ドームに導かれた構造への道

text= 宮里直也 教授

物 心ついたころから、建築が身近にありました。実家が大工を自営していたことで、木に囲まれた環境に育ち、積み木遊びの材料などはいくらでもありました。廃材で遊んで、顎を縫合するような怪我をして、今でもその傷跡が残っています。10歳前後のころだったと思いますが、実家が大工から鉄骨ファブリケーターへと業種変更したことがきっかけで、私は建築の中でも、特に鋼構造分野に興味を持つようになりました。木に囲まれた環境から、徐々に鉄に囲まれた環境で育つようになりました。幸いにも、鋼構造もまた自然と身近なものになりました。「働かざる者、食うべからず」と、時間が許す限り、工場や現場などにおいて、さまざまなことを手伝っていた記憶はありませんが、そのときの貴重な経験によって今を生きていると感謝しています。

さて、はじめて建築に対して強烈な印象を持ったのは、忘れもしない1988年の春休み、宮崎から、子どもだけで野球観戦と東京観光のツアーに参加したときのことです。そう、あの日本初の屋根付き球場の「東京ドーム」がオープンして1週間ほどのときです。東京ドームの屋内に入り、3階席から見たあの圧倒的な大空間に、未知の世界を体験した興奮を、今でもはっきりと覚えています。そして、東京ドームの完成に深く関係した斎藤公男先生、岡田章先生がいることすら知らずに、日本大学へ進学して、その研究室に所属して、今に至っていることは奇跡的なことですね。

大学に着任する前は、構造専門の設計事務所、住宅やマンション、病院など、大小さまざまな物件の構造設計を担当しました。しかし、構造設計への興味や、現在の研究の基礎となっている経験が得られたプロジェクトは、大学院生のころに携わったいくつかのプロジェクトです。博士後期課程まで進学したこともあり、たくさんのプロジェクトに携わる機会に恵まれました。その中でも、私のはじめて構造設計に携わり、構造計算書まで作成した「唐戸ブリッジ」、施工時の解析と、その計測で現場へ通った「さいたまスーパーアリーナ」は、特に印象に残っています。実際のものづくりの現場で、建築を実現させるために注がれるエネルギーを体感し、そこで交わされるやり取りから知恵や工夫を学ぶなど、貴重な経験がたくさんできました。

「建築を実現させるためには何をすべきか」、そのことを常に意識しながら、空間構造の分野でいろんなことに挑戦しています。私の研究室では、習志野ドームをはじめ、大小さまざまなイベントや実験を行っています。それは、学生のうちにさまざまな成功や失敗の経験をしてもらいたいと考えており、その機会をできるだけたくさんつくりたいと思っています。経験は力の源泉です。学生の皆さん、いろんなことに積極的に挑戦してください！

みやさと・なおや：1975年、宮崎県都城市生まれ。宮崎県立都城西高等学校卒業。1998年、日本大学理工学部建築学科卒業。2000年、同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。2003年、同博士後期課程建築学専攻修了。2003～04年、日本大学理工学部建築学科副手。2004～08年、構造計画プラス・ワン勤務。2008年～、日本大学理工学部建築学科。

右写真：東京ドーム

竣工して31年を超えた「東京ドーム」。今でも球場内に入ったときには、その圧倒的なドーム空間に感動する。写真は6月22日のオリエンテーションにて視察した巨人-ソフトバンク戦。



唐戸ブリッジ

山口県下関市にある「ふぐ」で有名な唐戸市場と隣接する駐車場棟の間に架かっている長さ44メートルの歩道橋。



さいたまスーパーアリーナのガラスファサード
湾曲した約8メートルの長さのファサード10スパンを連続させた、総長約80mの連続したケーブルに、所定の張力を入れて完成させる。



Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

2019年日本建築学会賞 受賞記念インタビュー

1. 建築に変革を興す音の捉え方の発明 | 羽入敏樹 短大教授
2. 大学の外的世界だからこそ学べることを | 今村雅樹 特任教授
3. コンセプトを共有し 伝え続ける大切さ | 近藤剛順 非常勤講師

16 [REPORT]

- ・REPORT 1 | 連続特別講義「短大の先」
- ・REPORT 2 | 2019年度デザインワークショップ
- ・REPORT 3 | 2019年度建築学科オリエンテーション
- ・REPORT 4 | オウケンカフェ #49

19 [NEWS & TOPICS]

- ・2019年第14回日本構造デザイン賞を与那嶺仁志非常勤講師が受賞
 - ・JIA 東北住宅大賞 2018 奨励賞を神田順客員教授が受賞
- ほか

21 [Message from OB/OG]

vol.08 より良い建築をつくるために 建築の他分野の職能を知る
山田達也 (竹中工務店 / 2010年修了)

23 [Architecture & Me]

Vol.97 東京ドームに導かれた構造への道 | 宮里直也 教授

24 [Visit & Criticism]

学生建築探訪 vol.11 「HandiLabo」見学記
石田弘樹・岩崎正人・金子稜・濱田昌城 (4年 | 古澤研)

SHUNKEN

2019 Oct. Vol.47 No.3

「駿建」

発行日：2019年10月1日

発行人：佐藤慎也

編集委員：橋本修・山中新太郎・田嶋和樹・

古澤大輔・道明裕毅・堀切梨奈子・山崎誠子

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.11

<HandiLabo>見学記

石田弘樹・岩崎正人・金子稜・濱田昌城

(4年 | 古澤研)

「新建築」2019年4月号の表紙を飾る<HandiLabo>は、2011年から活動を行う建築家集団「HandiHouse project」の自社オフィスで、大きな家型の倉庫が、DIYによってリノベーションされています。また、オフィス以外にも、コワーキングスペースやレンタル工房など、多様な場が用意されていて、彼らの発信の舞台として位置付けられています。そんな実験的な空間を体験しに学生たちが現地を訪れ、「HandiHouse project」のメンバーのひとり、加藤溪一さんとお話をうかがいました。今回の学生建築探訪は、その体験記です。

岩崎：この<HandiLabo>は「新建築」の掲載号の中でも異彩を放っていた。

石田：どんなところが？

岩崎：何といっても、設計に留まらず、建築家が自ら施工まで行っているところかな。

石田：確かに、セルフビルドのプロジェクトが「新建築」の表紙を飾ったことは驚き。僕は、DIYと聞くと、家具とかのイメージだったので。

金子：写真で見るより、実物は意外に「小さい」と感じた。大きな既存の倉庫の中に、DIYでできた木造のオフィスが、雑多なモノたちと一緒にあって、ひっそりと佇んでいたからかもしれないなあ。

岩崎：既存の倉庫の躯体は、線部材で構成されていて、写真だとパースペクティブに大きく影響しているのがわかる。でも、実際に行くと、モノが雑多に溢れていて、パースがわかりにくくなっているからかもしれない。

金子：誌面の写真は、倉庫に正対して撮っているので、倉庫という既存の殻も建築の一部になっているのがわかる。でも、そもそも<HandiLabo>という建築は、どの部分を示しているのかを議論しなくてはいけなと思う。木造の部分なのか、倉庫を含めてなのか。彼

らは何をつくったのかということ。

濱田：この建築は、「鉄骨の倉庫」と「木造のオフィス部分」、そして「オープンスペースの作業場」の3つできていると思う。彼らは、DIYで木造のオフィス部分を主につくったのだけれど、既存の倉庫やオープンスペースまで等価に創作されたような雰囲気、僕には面白かった。

岩崎：彼らのコンセプトを一番表しているのは、実は、作業場というオープンスペースであるのが面白い。彼らがつくりたかったのが、建築ではなくスペース、つまり「場」だった。

石田：別の言い方をすると、彼らがつくりたかったのは、場の空気感だったと言えるかもしれないね。

金子：僕らは普段、敷地の中に建築をつくるというふうに考えるのが一般的。でも、彼らは敷地の中に建つ鉄骨の倉庫を「敷地」に見立て、さらに木造の建物をつくることで、副次的に生まれる空地、つまり作業場やイベントスペースこそがつくりたかったという逆説的な状況が面白い。さらに、その雰囲気倉庫の外に漏れ出していく可能性が感じられる。僕らは、建造物をつくるのが建築だと思っているけれど、ここでは空気感をつくるのが建築になっている。

濱田：<HandiLabo>は、竣工して終わりということではなくて、成長途中のプロジェクトなんだと思う。竣工時点で時間が止まらない、生きている「場」という感じがした。何をもってして竣工というのか、というのが僕らに問われていたように思う。

金子：確かにオフィス部分はDIYできているので、今後も常に更新されていくだろう全体像が示唆されている。

石田：さらに重要なのは、DIYなんだけど、たとえば床なんかを見ると、鋼製束がとても細くて、建築が浮いているような感じがして、カッコ良かった！フィーレンディールトラスという専門的なエンジニアリングが、誰でも簡単に施工できる仕組みできているのが鮮やかだと思った。

金子：そして、軽やかな建築だったね。内部は細い線部材が集合して空間がつくられているのだけれど、人間がいる場所だけ、その線部材が切断されているような感じ。線の集合体をくり抜いたような印象だった。

石田：一方で、和小屋のような重厚さ、神秘さも感じられる二面性を感じた。

濱田：ガラスを見てみると、ペアガラスが使われていたり、素人性の一方での玄人性があった。これは、「HandiHouse project」という集団が、意匠設計だけでなく、現場に出て施工までを自分たちの手でやるからこそ、専門性とアマチュア性が同居しているのかもしれない。

岩崎：それが彼らの美学なんだと感じる。

金子：専門性に裏打ちされた面白さが随所に散りばめられて、全体を構成している。DIYというアマチュア性のみで構成された建築は、おそらく人を感動させない。けれども、今回のプロジェクトは違った。DIYという想定内に留まりがちな空間の質を、専門性によって超えていく感じがした。

岩崎：また、彼らは、一般の消費者とDIYのワークショップをするなど、建築する行為を開こうとしている。「モノづくりを強いコミュニケーションツールと捉えているから」という加藤さんの言葉が興味深かった。

石田：プロとアマと一緒にすることで、プロセスを共有することに価値が実装される。つまり、建築の価値の転換が行われている。

濱田：モノづくりのプロセスがブラックボックス化されてしまうと、建築はクレーム産業に成り下がってしまう。一方で、つくり手の手垢を消費者に見えるようにすることで、両者の信頼が強固になって、チャレンジできる環境が循環していくのだと思う。

岩崎：僕も卒業研究で、セルフビルドによって他者を巻き込むプロセスに着目しているが、既に実作で挑戦している彼らを見て、勇気付けられた。建築に対する視野がとても広がったと思う。

金子：同感。建築家の職能を拡張する可能性が提示されているプロジェクトだった。僕らも、今後、社会に出て建築と向き合う際に、視野を広げて、建築の未来像を提示していきたいと強く思った。

濱田：こうした取り組みを続けている彼らのことを、他の学生にも知ってほしい。「HandiHouse project」に興味が出た方は、ぜひホームページ (<https://handihouse.jp/>) をチェックしてみてください！

駿



既存倉庫の外観。



既存倉庫の中に新しい倉庫<HandiLabo>が建つ。



<HandiLabo>内観。インタビュー風景。

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>